病いの語りにおける困難な経験の語られ方

――線維筋痛症を患う人々の語りから――

大阪大学　野島那津子

1　目的

病いの語りは、患う人々の生きられた経験としての病い（Kleinman 1989=1996: 4）について当事者自身が語るものであるが、多くの場合、そこでは病い以外の困難な経験についても語られる。たとえば、過労、事故、近親者の介護、人間関係の諸問題についてなどである。このような病い以外の困難な経験を、患う人々はどのように語り、どのように意味づけているのか。本報告では、患う人々の人生／生活に生じるさまざまな困難が病いの語りの中でどのように語られているかを明らかにし、それらの困難と病いとの関係、および病いの語りの中で種々の困難が語られる意味について考察を行う。

2　対象と方法

本報告では線維筋痛症（fibromyalgia：以下 FM）を患う人々の語りを取り上げる。FM は、慢性の軟骨組織のびまん性疼痛を特徴とした疾患であるが、原因が特定されておらず、「疑義の呈された病い（contested illness）」として知られている（Barker 2011: 833）。そのため、医療機関を訪れても長期にわたって診断されなかったり、診断されたとしても完治の方法がなく全身の痛みに耐え続けなければならなかったりするなど、FM は患う人々の人生／生活に持続的に影響する。この FM を患う人々を対象に、患者団体の紹介を通じて得られた 9 名に対して半構造化インタビューを行い、逐語録をもとに語りの分析を行った。分析は、病いと同様に人々の個人誌に混乱をもたらすような困難な経験について語られた部分に着目し、それがどのように評価され、語り全体においてどのように位置づけられているかを把握すべく、語りの文脈に沿って行った。

3　結果・考察

分析の結果、病い以外の困難は、(1)病いと結びつけた語られ方、(2)病いとは結びつけられない別個の困難としての語られ方に大別できる。(1)は、主に病いの経験以前に生じた困難が「病因」として意味づけられており、病いの語りは個人誌に生じた裂け目を修復するという特徴を持つ（Williams 1984: 197）。一方、(2)では病いと他の困難とが並列に、ときには他の困難が病いよりも前面に押し出されており、病いだけが個人誌の再構築を要請する特権的な経験ではないことが示唆される。これらの結果の詳細な考察、および病いの語りの中で種々の困難が語られる意味については当日に報告を行う。

文献

Kleinman, A., 1989, *Illness Narratives: Suffering, Healing, and the Human Condition*, New York: Basic Books.（＝江口重幸・五木田紳・上野豪志訳，1996,『病いの語り――慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房.）

Barker, K., 2011, “Listening to Lyrica: Contested Illnesses and Pharmaceutical Determinism,” *Social Science and Medicine*, 73(6): 833-42.

Williams, G., 1984, “The Genesis of Chronic Illness: Narrative Re-construction,” *Sociology of Health and Illness*, 6(2): 175-200.